

「祐巳、お待ちなさい」

「な、なんでしよう。お姉さま」

「あなた、変わったタイの結び方してるのね」

さつき鏡でタイの結びをチェックしてきたばかりだ。今日こそは完璧のはず。

「お、おかしいですか?」

「だって、タイにガラスの靴を巻きつけてるんですもの」

「へ? ええええええっ!? なんでええ!」

私のタイの結び目に絡みつくように、ガラス製のハイヒールが取り付けられていた。全く身に覚えがない。

「いくら私の躰が厳しいからって、奇行に走るなんて見損なつたわ」

「違うんです! これは私の仕事じゃありません。見に覚えがないって言うか、私にも訳が解らないって言うか」

「もういいわ。やつぱりあなたを妹にしたのは間違いだつた。ロザリオ返してちょうだい」

「そんな……誤解です、お姉さま!」

「ゴカイだの帆立貝だの言ってるので、いいから返しなさい」

待ってくださいお姉さま! 帆立貝は言っ

ません! どうか、ご慈悲を……ごじ……ひ……を……。

「祐巳ちゃん出番よ。あら、この子、寝ちゃってる?」

「本番前だつてのに、余裕あるじゃない。こいつは大物だ」

「白薔薇さま、笑ってないで起こしてあげたら?」

「あなたが起こせばいいじゃない、黄薔薇さま」

「どっちでもいいじゃないの。ほら、祐巳ちゃん起きて」

譲り合いをしてる二人の間を割って、
紅薔薇さまが祐巳の身体を揺すつた。

「だから誤解なんです!」

「……びつくりした」

「あ、あれ?」

「ゴカイだかアコヤガイだか知らないけれど、祐巳ちゃん次、出番よ」

「へ? 出番?」

「今はシンデレラの劇の最中、でしょう?」

美しいドレス姿の薔薇さま方。私も美しいとまではいえないが、それなりに可愛らしいドレスに身を包んでいた。

「祐巳ちゃんがロザリオ受け取つたんだから、

シンデレラになったんでしよう? しつかりして、主役なんだから」

私がロザリオを受け取つた? あれ? シンデレラ劇が終わつた後の話だつたのでは? 結局シンデレラは様子さまがやり遂げたはずだ。

「まだ目が覚めてないんじゃないの。お姫様の目が覚めるように、私がチューしてあげようか?」

「白薔薇さまは黙つてて」

この懐かしい顔ぶれは、蓉子さまに聖さま、江利子さま。お互いに薔薇さまと呼び合つてるつてことは、私がまだ一年生の頃の話だ。

ひよつとしてこれって……タイムスリップ!? でも、設定が少し変わつてる?

まさかね……そうだ、これは夢だ。よくある夢オチつてやつだ。

と思つたのも束の間、よく考えると様子さまにロザリオを返しなさいって言われたのが夢だつたはず。目が覚めたら、ここにいる、でもこれも夢で、さつきまで見ていたのも夢で?

頭の中がクロスワードのように複雑に絡まつて、訳が解らなくなつてしまった。

「この子、百面相始めちゃつたよ」

「本番前の表情作りかしら」

「そんな悠長なことやつてる時間は無いわよ。

ほら、さっさと行きなさい！」

蓉子さまに背中を押されて、転びそうになりつつも堪えて、私は表舞台へと進んでいった。

「お達者で〜」

聖さまが笑いながら手を振っていた。

「お嬢さん、リンゴは要らんかね？ いっひっひっひ……」

真っ黒のボンチョにフードを被ってて、顔がよく見えないが、声と背格好からして由乃さんだった。魔女のつもりだろうか。

「シンデレラにリンゴって必要だったっけ？ カボチャと間違えてない？」

「うるさいわね、リンゴ要るのか要らないのかって訊いてるのよ」

「じゃあ、要らない」

「私のリンゴが食えないっていうの？ 食べなさいよー」

由乃さんは私めがけてリンゴを投げつけてきた。ノーコンなので全く命中はしなかったが。

「さては毒入りだと気が付いたの？ やるわねシンデレラ」

「由乃さん、白雪姫と間違ってるよ……」

「ごちゃごちゃ言っていないで、喰らいなさいよ」

「だから投げたら危ないって」

「痛っ！」

私の後ろの方で悲鳴が聞こえた。誰かに当たったようだ。

「大丈夫ですか……？」

「あなたが投げたのは、金のリンゴと銀のリンゴ、どっち？」

女神さまのような格好をした令さまが、鼻を真っ赤にして、涙目で私に尋ねてきた。鼻先に当たったのだろう。

「どっちも違います。それに投げたのは由乃さんです」

「じゃあ、この普通のリンゴかしら？」

「そっちで合ってると思います」

「正直者には、いいものを見せてあげよう」

そう言っつて、令さまは左手だけでリンゴを握り潰してみせた。

「すごい……」

「切れ目入れてたら、誰だつて出来るわよ」

「由乃お、タネをばらしちゃ面白くないでしょ」

「あの……この話つてシンデレラですよね？」

「そうだよ」

「カボチャの馬車は、いつになったら出てくるんですか」

「わらしべを手に入れて、最後にカボチャと馬に交換だったかな」

「ええっ!? なんか他の話と色々混ぜてませんか？」

「欲しいものが簡単に手に入ると思ったら、大間違い」

結局、わらしべを手に入れるところから始めることになり、苦勞の末、カボチャと馬を手に入れるのだった。

「令さま、カボチャと馬を用意しました。馬車にしてください」

「私にそんなこと出来ないわよ」

「そんな!? せっかく揃えたのに」

「祐巳さん、じゃなかったシンデレラ。お困りかしらっ」

「あ、志摩子さん……つて、どうしたの、その格好」

「困ったことがあれば、魔法少女志摩子に、おま・か・せっ☆」

「ちょうどよかった、これカボチャの馬車にしてくれる？」

「お安い御用よ。ロサロサギガギガガンティア、アイカツプリパラガルパンオジサン、カボチャの馬車にな〜れ〜」

呪文を終えると、見事なカボチャの馬車に変わった。

「ありがとう、魔法少女志摩子！」